

新 聞 事 實

第 二 號



定 價 三 錢 五 厘

西 垣 文 庫

文 庫 10

7306

2

80

75

70

65

2  
凡

緒言  
ソ天下ノ事情、ク相通シ未ダ見聞セザル者、  
ヨク知ルハ新聞紙ニ如クハナシ維新以來、  
日ニ盛シニシテ世ニ裨益アルハヨク、  
リト、夫レ僻遠ノ婦女子ニ至テハ未ダ其  
ルモノ鮮シ、豈聖世ノ民ト言フ可キヤ、  
公布ノ人、民普ク熟知セザル可キヤ、  
都鄙ノ所報勸懲、  
併ニ各種新聞、參考シ其讀、  
名ヲ附、  
也子ノリ、  
官評、  
明治八年五月十一日

新聞事實

第 二 號  
明治八年六月十一日

西垣文庫

御 布 告

編輯 吉田庸徳  
補正 吉田庸徳

第九拾號

海軍官船ヲ除ノ外、西洋形船へ賊難防禦ノ爲メ、大小砲設備ノ儀、  
差許候條左ノ通り可心得此旨布告候事

明治八年五月三十一日

太政大臣三條實美

○第一條 海軍官船ヲ除ク、外諸省使府縣所轄ノ西洋形官船並入  
民所持ノ西洋形商船へ大砲口徑四寸以内二門小銃三十挺設備ス  
ル事、若シクラズ、但シ船ノ噸數ニ因リ、本文ニ掲ゲル銃砲ノ數ヲ減ス  
ルカ、又ハ銃砲ノ種類ヲ取捨スルハ、其便宜ニ任スト、雖モ若シ増置セントス  
ル片ハ更ニ願出許可ヲ受ベシ。第二條、第三條、第四條、第五條、畧之

新聞  
 ○此頃太政官壹兩の札ハ通用せるの  
 通用せぬのと云事不付て諸新聞小  
 出ましたたが全く太政官民部省札の  
 内壹兩貳分壹分貳朱壹朱の五種  
 ハ通用致をもと申事で御坐りませ  
 ○東京牛込神楽坂金太樓にて  
 四月二十七日女踊りを催ふせ  
 一不見物の人ヲ勢集りたる  
 其中佛蘭西人一名居り  
 生まと傍ら小居合せし人々が  
 互に袖引きを見合せ手品や  
 獅子舞とい事替り此淨留理の  
 踊りあは異人さんふの澤るまいと  
 私語密笑してありしがやがて踊りも仕



舞小なれハ異人さんハ日本の語にて  
 小の禮を述べ帰らんとせしが兼て持来りし  
 杖の毒に思ひ有り合せし櫛の木の人杖を  
 取出し是を御持ふさいと出せば佛人ハ  
 直小紙を乞ひ筆とぞて  
 備りものとおひ人ぞ重し櫛はほへ  
 と認免おき帰りけまハ前  
 小笑ひし人々も此時大  
 に恥ぢりたりと人を  
 笑ひたり小  
 笑ひたり小  
 却て巴れが  
 恥ぢりく事ありの



御坐り  
 さま  
 さま  
 さま

○四月三十日の夜東京京橋五郎兵衛  
町大和傳四郎の宅へ持凶器  
先生が御見舞として罷越

され亭主傳四郎をとら  
まへ強談最中女房  
せいの早くも心づき  
大つそりぬけ出し  
鍛冶橋なる文番  
所へ援けをよこ  
息せき切て急ぎ  
往きし小折節未  
掛る巡査河野正さん  
に出あひさきば是ぞ天の御助け  
と仔細を語る幾人巡査ハむつと落つき身せくまのく  
シテ其賊ハ幾人ジマ女ハイ一人で御坐りまを又年ハ



甲が誠小  
御氣の  
毒でど  
さりま  
を報知  
新新聞  
見ハ  
た

幾歳位ジマ女ハイ三十二三で御坐りまを扱て強とうろ  
弱そりう女ハイ何れ強う御坐りませう而して色ハ  
黒い白いう又せいの高い低い女ハイ夫迄ハ  
氣が附ませんハテ困つたもんど  
夫ふらバ仕方が有ると五足六足跡へ戻  
れバ女ハイ其地で御坐りません此地で  
御坐りまを指し示せばア、そらくと呼吸  
の笛を取出し去を引が間息一たい小吹鳴  
らし手に提げたる燈火吹きけし  
生捕呉れん静う小刺ろくと案内させ  
つ女房と先に立て跡小付てぞ進をゆく  
然る小令時の沈つくハキクをるほ烈し  
ければ篤くのむりし逃去つと跡の祭り  
打振り力身却つて立たりと何と是でハ  
濟まをまい。此河野さんハ免職ハ成り  
少し御役ガ



○五月八日の  
曉方より處り  
東京府管下第  
大區六小區田端村  
副戸長武  
井織右門

と云者の宅へ  
盗賊が押入  
りとして大騒  
ぐも驚き追  
へ逃さりし  
の婆さん  
解き仔細  
立置し御  
由を聞  
何れもみ  
氣の毒千  
万の事  
なりと  
不敵  
ひや  
れ果  
奴で  
御坐  
らぬか  
役目  
有  
ら  
斯  
の  
モ  
謀  
計  
を  
御  
上  
ま  
で  
欺  
く  
と  
大  
膽  
と  
も



云ひあが  
りまそと  
可しとて  
出訴い  
せし處  
偽り  
の二百  
家内一  
掛け  
くしと  
がせし  
まし  
御處分  
依初  
ひも  
人の  
支配  
さる  
云ひあ  
がら  
併し  
お怪  
我の  
ふい  
の大  
慶で  
御坐  
らぬか  
りま  
そと  
彼は  
心配  
して  
直に  
区内  
の驚  
視分  
廳一  
訴へ  
可し  
とて  
主人  
織右  
工門  
自ら  
ら右  
の次  
弟を  
出訴  
いとし  
ました  
たお  
付驚  
吏が  
段々  
取組  
を  
せし  
處豈  
そら  
んや  
是は  
全く  
偽り  
にて  
已れ  
が慾  
心よ  
り彼  
の二  
百九  
十六  
田を  
掠ん  
為す  
家内  
一同  
申し  
合せ  
皆々  
縄を  
掛け  
子供  
一人  
を残  
し大  
声  
を  
泥  
棒  
と  
呼ぶ  
て近  
隣の  
者ま  
でを  
さ  
わ  
がせ  
し次  
弟を  
逐一  
小  
白  
状  
い  
とし  
ました  
ゆ一  
其  
傍  
に  
留  
め置  
れま  
した  
ら  
ん  
と  
御處  
分  
成  
り  
ま  
し  
と  
依初  
も  
人  
の  
支  
配  
さ  
る



○東京木挽町紀伊國橋の辺に  
 河岸小煉化石が澤山積んで有り  
 升が五月八日の朝銀坐一丁目の  
 湯屋渡世青木豊吉が方小雇れし  
 宣吉と云者木拾ひ出う午後一時  
 頃其積重さねたる煉化石の間どへ  
 進をりき晝寐をして居りましたが寐  
 がへりり伸でも致しまし七八尺も高く  
 積上り煉化石が一時小尾落し  
 其身ハ下埋ちられ大切な命も既に危きを  
 向ふの松床と云髪結の弟子がウレくうなる  
 声き、付て近所の人小告げ知らせ多勢集り  
 やうくと煉化石を取除て引出せしが懸身数り西の  
 疵とけ立居もならぬ苦痛の体ゆへ種々介抱して宿  
 所を糾し親方へ渡せしとど其ような所へ寐るとの余り



わうげた男でハ有りませんり子供衆まど煉  
 化石の積で有る處や又らぶない所  
 で遊ぶと此男の様ふあり升ゆへイラ  
 ハル御世姑から御用心なされませ  
 ○是の又横濱石川口の湯屋  
 渡世田辺忠兵衛が雇ひの者  
 五月十九日午後二時頃木  
 拾ひ小出て同所福富町の  
 米屋某の裏の芥溜の中小  
 て紙の包を物を見つけ  
 何物あらんと手小取らげ開きて見  
 れハ出さといり小ペラ札百三十圓セツ  
 たり驚き大愛と直に区内の扱所へ  
 届けて出ましとれハ幸ふ落し函へ



ちぐひ正直  
 ひどんとり  
 まし木拾  
 前小出  
 新聞  
 横濱

たる人も早速知れ御規則通り配分と貰ひ受まし

九と

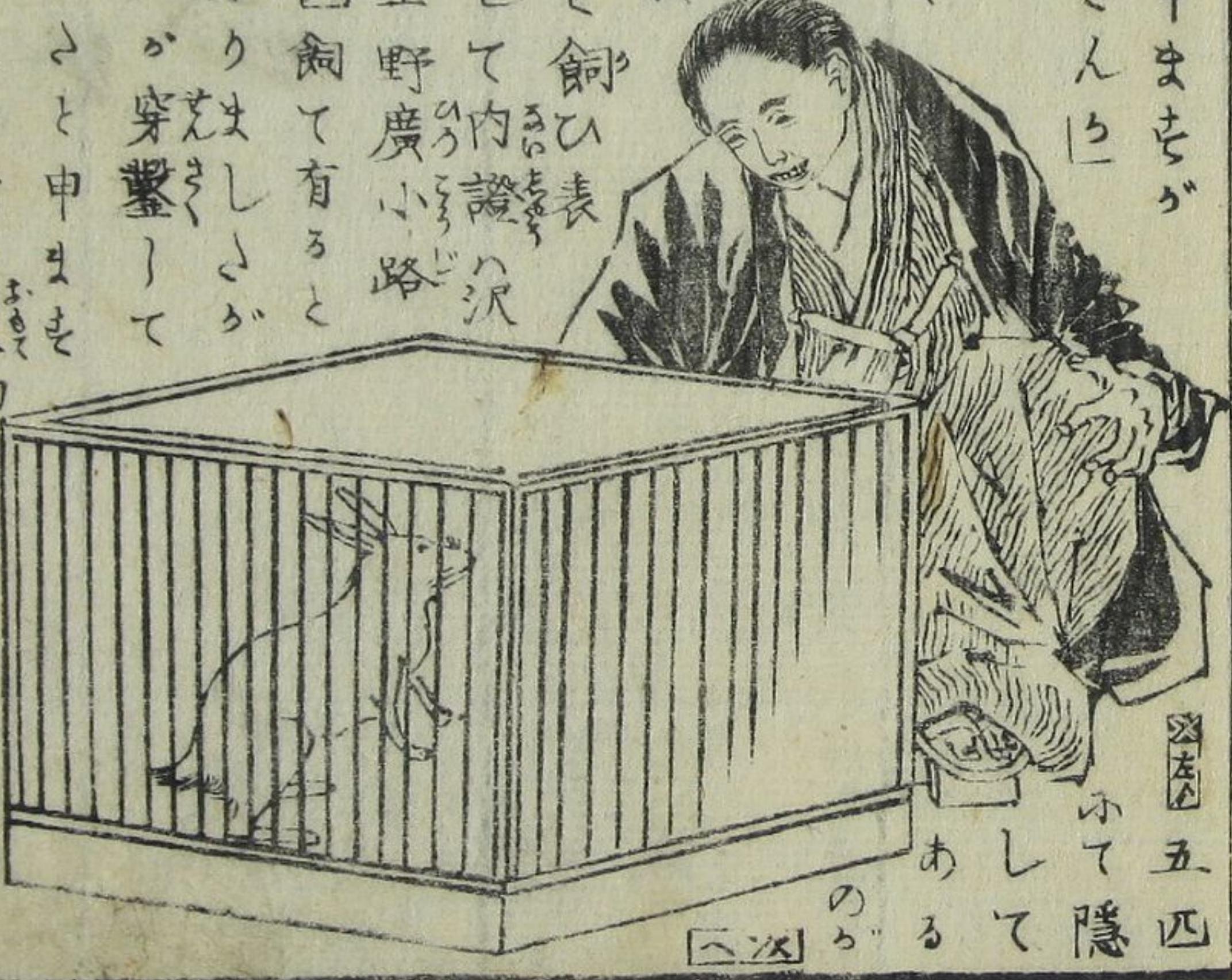
男ゆ一此仕合ふも  
選ひましたらう

○東京銀坐二丁目の  
商柴崎半藏と云人の  
女のもつとて當  
十一年八月ありが  
其容色美小して近鄰並ぶ者  
ましの噂せらば少くも  
性質なり此女の幼少にして母小別れし  
か父や兄小孝教を尽し先祖父母にもよく  
仕へ又學問の深く志ありて西三年前より菽園大人の門人と  
まり和歌を學んでありまして當春御歌會をじり披露す  
都鄙迎年 不とくはいそふ心ハのそらみみ  
ルひあふ年のえト免と といまうと又昨年頃より獨り



の横文字を學んでいと申さまが  
扱く感心な女で御坐りません

○兎を飼ふ者 月一匹  
付金一山づ、税を納り隠  
倍の置金と出さねばならぬ  
の何の機能をなきものを飼ひ表  
向ハ一匹二匹の積りゆして内證  
山隠してある者が有り升上野廣小路  
の若松屋と云蕪子屋ハ一匹飼て有ると  
て毎月一山の税を納めて居りましか  
どうも此頃佐しいとて役人が穿鑿して  
見ると畢竟卅三匹もね出しと申さま  
浅草下平右工門町の岩崎某と云者の表向



七十五匹頭れましと又本所縁  
町小て東京府士族某さんの  
家より馬より大食の免が  
一匹飼て有り升そらで毎  
日豆腐のらら荷以桶  
何荷とウ入ると申升が内

○人力車曳と乗客との殊

よ才と何云ふ事が有りま  
して遂小の巡査の御厄介と  
掛事有り升が是ハ畢竟元衆  
車夫の横着より起る事と思  
者ガ有り升五月十八日の事  
須田源藏の女きんハ其弟を  
と買の求め持来りしに或る  
人力車曳が乗れと進りしゆ



連中が沢山有り升  
から追々申上ま

○実ハ百匹の余居

まど此申升  
御利口様

町迄何程で行くときけハ車夫の申小ハから身をらバ一朱で  
御坐り升が御持参のガ有り升りら五百文小負ませうといハ  
客の女ハ持物が有るゆへ小負るとハ余りあうしと笑ひけれハ  
車夫ガ又云ふハ持物ガ有り殊小女の事であれハ附込で高  
いと思われてハ済ませんゆへ負ませとて遂小女客ハ挽白共  
四人相乗ふて我家へウヘリ  
斯く父と又語りけ  
れハ父も是と奇  
として貸銀  
一朱外酒代  
少し又  
其車と雇ふて深川辺へ  
用達小ゆきしとど他の  
人カ車も皆此者のやう  
心掛あらバ巡査と煩こされ



車も有りませ  
惠と受  
又意外の



○大坂府下第二大區  
 九小區長堀橋  
 筋上一町目  
 小住む盲人  
 生久十市郎と云者  
 前かどの座頭と  
 いこれ仲間内小  
 ても相應に立ち  
 者おれと座頭と云事  
 既お御療し小成り素  
 より育らるの事ゆ一外  
 是とて様ぎも知らぬ事  
 所て方この席亭小出て流行唄  
 をどと歌ひ僅くの賃錢と貰ひて  
 月ヨを送りしゲ四月十日の夜十二



途江  
 強盗ども  
 合せたる金札の  
 二十錢を何へて  
 分れしと近頃めづ  
 らしき咄しでい  
 有りま

時頃へ力車小乗り席より帰る途中江  
 橋と浄正橋の間ふて凶器持る強盗ども  
 二人一同小たんびらものを抜き見せを閃  
 かせど蛇よも怖ぬ盲目の事をれバ一向平氣の  
 平左工門持る金を残らむ渡せと云これビツクリ  
 驚さし々のぐれ所と席て稼ご十錢斗りを  
 財布の終是より外ハ御坐りませぬとさし  
 出せば始めて賊も盲らと知りませぬとさし  
 非道の強賊も憐れ小や思ひし  
 か唄とらたへバ赦してやると  
 財布も取らむ云ひければ有がごとく  
 と声むりあげて下くさり歌ひければ  
 去むしが聞き居たりしがもうよしくと  
 立分れんとする時ふまうさず盲人声を二け若しくと  
 呼留て只今の歌ひ賃を下されと催促をれバウそらくと



せんか

東京取次諸國賣弘

和泉屋市兵衛  
 森屋治兵衛  
 藤岡屋慶次郎  
 山口屋藤兵衛  
 辻岡屋文助

第一大區十三小區  
 兩國吉川町二番地

日冲社

編輯兼出版人

松木平吉

印刷ニ比ス

邑橋昌三郎

○東京淺草吉野町紙屑渡  
 世重三郎と云者の男子ハ  
 六歳斗り成り升が五月  
 廿二日紙屑の中より少き  
 ビンよ白き粉の入るるを拾ひ  
 出し子供心小何氣をくふ  
 めまししガ忽ち夢中とて手足をも  
 が苦しけれ家内の者ハ大驚  
 き早くも心付令戸ある松本先生の出張所  
 へ連ゆき岩瀬先生は診察を願ひしうが全  
 毒薬に当りしなりとて暫時の内小吐き瀉し  
 其上尚も療治小手を尽されれば追々快氣  
 不成りまししが誠小恐ろしき事で御坐り  
 まま併し上手な御医者様御掛りまし  
 から死をむぬ直りましと此子の仕合



